オックスフォード大学留学記
～留学を振り返って今思うこと～

堀越 桃子
Momoko Horikoshi
国立研究開発法人理化学研究所統合生命医科学研究センター
腎・代謝・内分泌疾患研究チームリーダー

はじめに

私は2010年4月から6年と少しの間，英国のオックスフォード大学糖尿病内分泌代謝センターおよびウェルカムトラスト人類遺伝学センターのMark I. McCarthy教授グループに所属し，2型糖尿病やそれに関連する病態の遺伝素因の研究に携わってきました。本誌には2012年に一度留学記を載せていただきましたが，今回，日本に帰国して約半年が過ぎ，当時の自分の留学記を懐かしく読み返しながら，もう一度オックスフォードでの生活を振り返ってみました。

McCarthyグループの研究所での日々

私の6年に及ぶ留学生活は，研究だけでなく毎日の生活においてもどっぷりと英国研究者生活に浸かった日々でした。毎朝自転車で20分ほどの距離にあるMcCarthyグループの研究所まで，出勤。同僚達と机を並べて研究に励みました。解析など新たな知識を得られただけでなく，様々な人と巡り会えたこの機会に感謝しております。

McCarthyグループの研究は多岐にわたっていますが，主流な研究の1つとして大規模な全ゲノム関連解析および次世代シーケンシングデータを用いて2型糖尿病とその関連疾患・形質の遺伝素因の解明に長年携わっております。そこから得た遺伝情報を使い，さらにヒト，動物，細胞などのモデルを用いたアプローチによって生物学的な理解を深め，その知見を臨床応用につないでいます。このためMcCarthyグループはメンバーも多く，また研究拠点も病院（オックスフォード大学糖尿病・内分泌代謝センター）と研究所（ウェルカムトラスト人類遺伝学センター）に分かれていて，各人の研究テーマやスペシャリティーは細分化されています。病院を拠点とするグループは，単一遺伝子病としての糖尿病，MODY，多嚢胞性卵胞症候群などの臨床研究と，様々なモデルを使ったウェット系（実験）を主に行っています。私が働いていたウェルカムトラスト人類遺伝学センターでは，統計学的手法を用いてビッグデータを解析するドライ系（コンピューター解析）グループが活動しています。

コラボレーションを軸に研究を推進

以前にも書きましたが，現在の2型糖尿病遺伝子研究の重要なキーの1つは「コラボレーション」だと思います。各々の研究グループが持っているコホートにはサンプルサイズ，臨床情報の多彩性に限りがあり，1つのグループだけでは到底十分なパワーのある解析はできません。そこで筆頭研究者のネットワークを使って（それが今ではコン

SAMPLE
Copyright(c) Medical Review Co.,Ltd.